

十九 中国三昧、三題晰

BS放送で中国のドラマ「項羽と劉邦」を放映している。八十回連続という長編である。中国の人々が最も親しんでいる歴史物語は、この物語と『三国志演義』だろう。以前に放映された「三国志」は時々しか観なかつたが、今回は昼間やっているのを録画して、夕食後の腹ごなしに観ている。司馬遷の『史記』を読んだけど記憶がうすれているし、現代の中国人が歴史ドラマをどう描くかにも興味がある。そういう中、義兄が上野の博物館で「台北故宮博物院特別展」を見学したおりに、その図録を買って送ってくれた。展覧会の図録をあらかじめ入手するのは初めてのことである。ページをめくると、見ごたえのある美術品が並んでいる。太宰府に巡回して来るその展覧会を楽しむために、ていねいに学習することにした。ところで、前からゆとりがあれば『三国志』を読みたいと思っていたのだが、ちょうどそういう気分になった。ただし、ファンの多い『演義』ではなく、種本である陳寿の書いた正史の方である。歴史好きの者には歴史書を読む方がおもしろい。こうして夏の一時期、テレビドラマと皇帝の収集品の図録と『正史三国志』との三つで、中国三昧の日々を送ることになった。それを三題晰にして書きとめてみる。

一、「台北故宫博物院特別展」図録

台北故宫博物院が日本で開く特別展の図録は『神品至宝』と名づけられ、どれほど大切な品々かを表明している。なるほど、宋から清まで歴代王朝の皇帝たちが収集した文物はすばらしく、宋の徽宗や清の乾隆帝が魅了された美術・工芸品の出来栄えは感嘆するほどで、それを観た昔の人は皇帝たちと同じく神品至宝だと思ったことだろう。

中国絵画の一級品を、解説文に教えられながら鑑賞すれば、その長所が見えてくる。好みの作品があつて、つくづく観ていると魅力に引き寄せられ、作者の感性や心持ちが伝わってくる気がする。近代になってヨーロッパ絵画を熱心に学んだ日本にいれば、伝統画と洋画との両方を眼にする機会が多い。そういう眼で中国絵画を見れば、日本の絵画が中国絵画から受けた決定的な影響が自明である。素養のない日本人が中国の名作に魅せられるのは、知らず知らずのうちに受け入れる下地ができていたからだろう。画家たちが丹精込めた作品群はまた、ヨーロッパ絵画との比較から、東アジアの絵画がある限界をもつことを気づかせる。画家の生きる社会の文化が、対象の捉え方や表現の仕方などの枠を決めているのだと知られる。たとえばわたしの自然を見る眼はそういう美意識に導かれていて、

もし毎日眺める海と対岸の山々を描けば、拙く山水画を真似ることになるだろう。

書は学生時代にわずかに練習したことがあるので、なんとか巧拙を区別することができる。中国の歴史上珍重された名筆家の書は、観ていてたしかに気分がよくなる。それぞれの違いを識別できるほど了解できないが、人の心に働きかけるものを醸し出していると思う。知らない字ばかりで漢文も理解できないけれどそう感じるのは、文字の意味を理解しているからではない。ところで、アラビア文字でも「書」の美が鑑賞されるそうだがわたしによく理解できないから、書かれた文字の羅列に美を感じる要因がなにかあるだろう。わたしがひらがなや漢字を書けるようになるまで練習をしたことがあり、実際に書きつけるときいつも満足には至らないことと関係しているのかもしれない。文字の大小や形や間隔や文字列の描く曲線が、腕の動作を想起させ、調和に気づき、美しいという感覚を呼び起こすのだろうか。

図録『神品至宝』は限られた数の作品を載せているので、おのずと時代の特徴と変遷を多少なりとも理解することになる。

蘇軾の詩は以前から好きで、詩賦ににじみ出たその人となりを尊敬していた。日本で昔あった展覧会で手紙を見たこともある。だが「行書黄州寒食詩卷」は、何度も火災を免れ

たその数奇な来歴を知れば、いつそう目を凝らして観ることになる。感興に誘われるままに、「赤壁の賦」を真似て賦というものを試みたが、それは別のところに記す。その書を他の書家のものと比べれば、とてもよく整っているとは言いがたい。しかし、運命にもてあそばれ東坡と号することになった人は、同時代人からも、後世にはさらに敬意をもって仰がれたのである。「寒食詩卷」には蘇軾に兄事した黄庭堅の跋文が添えられている。皇帝の収集の対象でもあった黄庭堅自身の書は見事なものだが、跋文は、書風を蘇軾に合わせ、書でも敬意を表わしながら、その詩の境地を李白に勝ると書いて推す。

知性の人蘇軾は、宋代士大夫の教養と美意識を代表し、また人生に対する態度の模範ともなった。それは、経済の繁栄と科挙制度などによる文治主義が社会と文化の成熟をもたらした宋代での出来事である。世界に先駆けて近世になったと日本の歴史家は評した。そこで中国の芸術は洗練の頂点に達したのである。絵画を観てもそのことがうかがわれる。洗練の極みを体現しているのは宋代の青磁である。白みを帯びた淡く青い色の単純な形の磁器が静かに存在するのを眼にすれば、ああここに至宝があると思う。これ以上の言葉は要らないだろう。

この文化と芸術の上昇をリードしたのが皇帝だというのも中国のおもしろいところだ。

皇帝の美術品収集は、自らも一級の芸術家だった宋の徽宗に始まる。政治をおろそかにして身を北方「金」の虜囚とした皇帝の熱情は、図らずもその収集品の散逸を免れさせた。愛蔵品は前皇帝から奪われたけれど、身柄と同じく捕獲品として金へ送られた。そして、収集文物は皇帝を権威づけるものの一つとする伝統が生まれ、中国古来の名品がまとまりある集成となっていくたのである。以後の中国文化は、宋の文物を一つの見本として発展継承することになる。士大夫のあり方も継承される。図録『神品至宝』はその変遷をよく示している。それらの至宝は、中国人の美意識と鑑賞態度の基準をつくり、社会的態度の背後にある感覚にまで影響しただろう。

特に元・明・清へと続く陶磁器は発展をたどりやすい。青磁は宋を超えることが難しくなったことを示し、さらに異民族の好みが影響して、明の染付が色彩や絵柄の多様化へ向かったことを教える。時代は技術の精密化を進め、清の琺瑯になれば、その超絶技巧に驚くほかはない。ほかの工芸品もまたそうで、驚嘆すべきものがある。

清の皇帝たちは、そういう至宝の数々を身近に置いて楽しんで来た。宋の徽宗に倣った清の乾隆帝が代々受け継がれた文物を集大成した。その父雍正帝の文書は非凡な皇帝であったことを示し、子の乾隆に満足を与えたことだろう。それにしても、中国史上重要な書物をすべて複写・整理するというような大文化事業は、中国の皇帝にしてはじめてできたこと

だ。歴史の教科書で『四庫全書』という四文字で習った書物(?)が、とほうもないものだというのを改めて教えられた。それも『神品至宝』の一つなのである。感心しながら図録を閉じた。

日本の美術・工芸品を概観だけでも、これほどまとまって勉強したことはない。一つ宿題ができた。

二、『三國志』

『正史三國志』はちくま学芸文庫を読んだ。日本語訳で八冊もある。全部を通読するほどの時間がないので、読んだのは、魏・蜀・呉の帝紀に当たる数巻と、詩文でも名を残した曹操・曹丕・曹植父子のうち帝紀に登場しない曹植の伝と、諸葛亮伝だけである。もう一つ、日本古代史に関連する第三十巻「烏丸鮮卑東夷伝」が、わたしの関心事である。

筆者陳寿の書きぶりは簡潔な名文と評価されてきたそうだ。大量の註を加えて『三國志』のページ数を倍増させた斐松之は、その註が合理的な考え方を示す人だということを示し

ているが、著者陳寿の記述の難点を突くことがほとんどない。従来の評判どおり、陳寿が史料のうち真实性の高いものだけを選んで書いたと信じてよいだろう。陳寿は、末期の蜀に仕えて自身の見聞もあり、同様に直近の前代を見聞した人たちがいたのだから、慎重に隙のない書き方をする必要があったのだと推察される。それが、簡潔に出来事をつらねる記述にしたのだろう。

後世、三国のうちどの国が正統性をもっていたか、陳寿はそれに正しく向きあったか、という議論がかまびすしかった。時代が下ると漢を正統に継ぐのは蜀だと唱える人が出て、明代の小説『三国志演義』が広く流布すると、その立場が優勢になった。しかし、政府の正統性ということは政治性の高い問題で、歴史政治学的な観点から論じるべきで、情緒的に好みを言ってしまう方がない。三国を統一した晋で歴史書を発表するからには、晋を正統としないわけにはいかない。そして、晋は魏から政権を継承したのだから、魏に正統性があったとすることが必然となる。『三国志』はこの立場で書かれている。その上で、仕えていた蜀がほろぼされたのちに晋の臣下になった陳寿が、蜀をどのように記述したかが問われるのである。『正史三国志』の訳者が論じているとおり、陳寿はもと仕えていた蜀朝にできる限り敬意を払うように工夫した。

大局から見ると、魏は、古来中国の中央政府が治めた黄河流域と周囲、さらに西と北と東北で漢の版図と同程度まで回復した。呉は、戦国時代の楚のほぼ最大版図に加えて、漢が支配した南辺まで征服し、蜀は、巴蜀の周囲と、さらに南部に支配を広げた。三国合わせて漢の版図をおおよそ回復して、秦・漢と続く統一王朝が拡大した支配システムの浸透した領域を表示している。しかし呉書の記述は、中心部のすぐ近くにまた異民族が混在していることを語る。長江流域の稲作地帯に古くから文明があったが、東晋以前には、華南は人口も少なくまだ発展途上地域だったのだ。また巴蜀にも古い文明があったが、秦が征服したのは紀元前三百年少し前のことである。呉と蜀が晋に接収された時の戸籍簿などの数字を、斐松之が引用している。呉が、男女の人口二百三十万、米穀二百八十万石、兵士二十三万なのに対して、蜀は、男女の人口九十四万、米穀四十余万石、将兵十万二千である。統計上それらの数字に問題があったとしても、古くからの中心領域を支配した魏の經濟・軍事指標がはるかに勝っていたことを疑うことはできない。だから、客観的に見て魏が中心王朝だったのである。呉が時々魏の宗主権を認める書を送ったのは、その客観的な優劣の認識を示しているだろう。呉よりも力のない蜀を中心王朝とするのはさらに困難なのだ。呉と蜀が魏に対抗する戦略は同盟だった。

魏・蜀・呉の三書の分量は規模に応じて配分されている。中心王朝魏の帝紀に多くのペ

ージがさかれ、中国のこの時代の歴史の主要な事項はそこに記述される。漢朝の記録から連続的に受け継がれたらう魏朝の史料に基づくこの記述法に、大きな欠陥はない。帝紀で歴史を語ることになる。太祖曹操の活躍が目立つことになる。彼が秀でた戦略家で同時に大政治家だったことが浮かび上がる。その点で、蜀の劉備、呉の孫権が見劣りすることは免れない。支配がゆるんで動乱の世になれば、入り乱れての戦いになり、その中から各地域で群雄が勝ち残り、それぞれの地域政権に近づくのは中国の歴史上いつも生じる事態である。日本の戦国時代も同様だ。織田信長は、曹操と同じく、長く政府のあった中心領域で勝ち進んだから統一への主導権を握った。だから、歴史記述の主役は、織田信長であり、曹操となる。違うのは、織田信長が、将来の政権安定について思慮が足りず、形式的に臣従していた足利將軍を早く追放したのに対して、曹操は慎重に事を運んだことである。曹操だけでなく、劉備・孫権について、資質を語るエピソードが語られているのは、いつの世にも見られる成功譚に付随する物語と言える。

しだいに蜀正統論が強くなった要因は後世の歴史にある。呉をほろぼして統一を果たした晋は、十年すると内戦が起き、四世紀初期に北部を異民族に征服され、南半分だけを支配する東晋になった。それでなくても歴史上大義名分を大いに論じてきた中国で、外敵に

国の中心部を奪われ、漢の流れをくむと考える漢民族が正統性を主張する必要が生まれた。北方異民族が中心領域を支配する時代が長く続くと、彼ら支配者も漢民族に融合されたが、もう一度宋が北方異民族に追われて、南宋が北部と対立する時代になる。こういう歴史の中で、愛国や忠義という概念が強調されるようになった。儒学を編成し直した朱熹は、南宋の臣下だったので、大義名分論を強く打ち出し、漢の皇帝の末裔である劉備の蜀を正統王朝とする。朱子学は南宋以後の正統学問となったから、蜀正統論の方が強くなったのである。ついでに言えば日本でも、鎌倉時代から戦国時代までの武士たちの行動は実利に基づいていた。武士道が唱道されるようになったのは江戸時代になってからのことである。『演義』はそういう後世につくられた。細かく言えば、劉備は同じ劉姓の地方政権を奪つて国を建てたので、正統論は少し屈曲する。孟子の革命論を援用しなくてはならない。だがそれは、他姓の王朝にも利用できた。

当事者たちは政権をめぐる闘争の中で、正統論にどういう態度で臨んだか。『孫子』を註釈し現存する形にしたという知識人でもある曹操は、歴史によく学んだのだと考えられる。漢朝に対する貢献を誇れる立場に立った彼は、魏王に登った。しかし、皇帝を傀儡とするほどの権力をにぎっても、死ぬまで、新の王莽のように帝権を奪わなかった。息子の代に帝位を禅譲させる手順を踏んだ。曹操は、年月をかけて世論に受け入れさせ、新王

朝が長続きすることを狙ったのだと推測される。劣勢の劉備は、自分の王権を安定させるために、魏に対抗して帝位に就く必要があった。そして最もアピールできる論拠は、自分が漢室の末裔だということだった。呉は、どちらかといえば現実的に対応したので皇帝を称するのが遅れたのだろう。だが三国鼎立でバランスをとる方が、自国の存続に有利と判断してそうしたのだ。みな政治上の実利的な行動である。

陳寿はどう考えていたか。三国の闘争を見聞してきた堅実な歴史家は、正統論が政治的な主張に過ぎないと認識していたはずだ。三国で、黄龍や珍鳥が出現したという吉祥を何度も宣伝し、そのあとで、天命が革まったからとしぶしぶ帝位に就くという形式が踏まれた。陳寿は、その記録がパフォーマンスだったということを承知していて、それを採録したのだ。ともかく、晋の臣という立場が魏を正統に据える記述にするが、魏は現実の中央政権だったから、矛盾は少ない。それでも、三国が皇帝を称した事実を消したくなくて、三つの書から構成される『三国志』という史書に編成したと考えられる。魏から帝位を奪った晋は、自分の立ち位置を尊重されれば、前代の歴史を三部構成とすることに目くじらを立てる必要がない。そして陳寿は心情において、自分が生まれて仕えた蜀に対する愛着があったので、蜀書の記述に特別な心配りをしたのだろう。

入口の話にこだわって、魏帝紀・蜀主・呉主の本文について話す余裕がなくなった。赤壁の戦いだけに触れておこう。なにしろ『三国志演義』の山場で、最近中国でまた大々的な映画が作られたほどだから。ところが陳寿は、魏・蜀・呉の歴史を記述するはずのそれらの巻で、三国鼎立の方向を決めたこの戦いをずいぶん手短かに記すだけだ。魏書では、「曹公は赤壁に到着し、劉備と戦ったが負け戦となった」。蜀書では、孫権の派遣した周瑜・程普の軍が劉備と協力して「曹公と赤壁において戦い、大いにこれをうち破って、その軍船を燃やした」と記す。呉書では、「赤壁で敵と遭遇し、曹公の軍を徹底的に打ち破った。曹公は残った船に火をつけ、兵をまとめて撤退した」とする。矛盾しているようにも見え、なにかしっくりこない。三書とも、曹操軍の敗北の一つの要因として病気の蔓延を挙げている。

『演義』は、諸葛孔明が作戦を立てた立役者として描かれている。それを確かめるために諸葛亮伝を開くと、孔明は劉備と孫権の協力を成立させるのに大きな役割を果たしたが、赤壁の戦いそのものでの活躍は記されていない。疑問が残るから、追加して呉書の「周瑜・魯粛・呂蒙伝」を読んだ。前後の戦闘を含めて一連の戦いを具体的に記述しているが、火攻め作戦の提案者は呉軍を率いる周瑜ではなく配下の部将黄蓋で、曹操軍に自分の部隊は降伏するという偽の申し入れをして、焚き木などを積みこんだ船を近づけた、とある。陳寿は、

赤壁の戦いの詳細を周瑜の伝にまわしたのである。

「周瑜・魯肅・呂蒙伝」は、三人の名将のすぐれた資質を語り、文学的な香りまでして読みがいのある巻だった。しかし、呉の將軍と部將の活躍を語る内容が、呉の「正史」を記述する呉主の巻に「曹公は残った船に火をつけ」とあるのと矛盾する。この矛盾は軽いものではない。魏書がそっけないのは、負け戦について多くは語りたくなかったとすれば、理解しやすい。ところが、友軍の劉備側の蜀書で「(曹公の)軍船を燃やした」としているのに、勝った側の呉の書で、軍船を燃やしたのが曹操側だとするのが腑に落ちない。やはり釈然としない。事実はどうだったのだろうか。

そこで、曹操軍と孫権・劉備連合軍(ただし劉備軍は少数)とが対決することになったもつと大局的な情勢を見てみよう。通常ここで登場するのがやはり諸葛亮である。蜀書では、有名な三顧の礼をもって劉備が孔明に会えたのに続けて、孔明が天下三分の計の構想を説いたことになっている。場所は中原から見て西南部の漢水 downstream 流域の荊州。劉備は中原で機会を得られず、荊州を支配する劉氏の客將として身を寄せていた頃で、展望はなかった。その状況で孔明は、曹操が華北をほぼ制圧した今は敵わないが、長江の南に孫権が勢力を固めているので、ここ荊州を押さえさらに巴蜀を占領して孫権と同盟すれば、三者拮抗し

て国を保てるという構想を語ったというのである。まだ荊州の客將に過ぎない劉備に語った構想を、のちにそのとおりに実現したというのだから、読者は感歎しないわけにいかない。蜀書は続ける。曹操が自ら荊州へ遠征して来たちようどその時、支配者の劉氏が死に息子が継いだ。曹操軍に敵わないことを知る息子が降伏したので、劉備は南へ逃げる。ここで、孔明は呉の援助を求めるところを提案して、使者となって呉に向い、説いて呉の派遣軍が来るのである。そして赤壁の戦い。窮地に立った劉備を立ち直らせる孔明の戦略が光る。この一連の話を大々的にふくらませた結果、中国人みなが諸葛孔明を好きになつていくのである。

しかし、『三国志』は三重奏で中国の歴史を語る。当時の天下の情勢は荊州を戦略上の焦点にしていた。曹操も諸葛亮と逆の立場からそれが分かつたから、遠征におもむいて長江上流を押さえ、呉に対し優位に立とうとしたのである。呉にも、戦略をわきまえる名將がいた。周瑜の伝では、荊州の軍を加えた曹操軍は総勢数十万と豪語して、呉の群臣は降伏に傾いたが、周瑜が、父兄の代から続く孫権の支配は固く、陝西省の西には曹操に敵対する勢力もいて、水軍の強い呉は防衛できると主張して、西の前線へ向かつたことになつている。さらに、赤壁の戦いで勝利すると、別の劉氏の支配する蜀を奪取することを説いて、長江上流でその準備中に死んだと記す。それに続く魯肅の伝が、じつは、呉側の戦略

の主唱者は魯肅だったことを明かす。魯肅は曹操が発進する前に荊州に向い、荊州の降伏と劉備の逃走に遭遇し、劉備に呉に協力するように説いて、孔明を孫権に会いに行かせたのだと。三者それぞれにりっぱな軍略を実行した、ということになる。

こういう『三国志』の記述を註釈者斐松之が批判して、呉書を基準に、孫権と劉備が協力して曹操に対抗するというのは、「すべて魯肅の元来からの計画であった」とする。ところが蜀書がそれを諸葛亮のはかりごととするのは、矛盾だと指摘する。斐松之は言う、——このように書き方に矛盾があるのは、二つの国の史官たちが、それぞれが伝聞したところを書き記し、競って自分の国の立派さを称揚して、それぞれが手柄を一人占めしようとしているかのごとくである。しかるにこの呉書と蜀書とは、同一の手に成るものでありながら、こんなふうに食い違っている。歴史記述の根本に違反するものである——。

この批判は陳寿に手厳しい。これを現代的な観点から考えてみよう。正史と認定される歴史は、世界のどこでもその権力にとって都合のいいように書かれる。まして、実証的な歴史学が確立するまでは、史料批判の方法も未熟で、現代からみれば不十分などころがある。斐松之の批判の前半は鋭い。対立する魏・蜀・呉のそれぞれで国を立派に記述しようとしたらう。三者の中では、後漢王朝が存続する中で成立していった

魏で、歴史記録の体制が整っていたと考えられる。後漢末から魏にかけて、保管された記録は同時代史である。添削があったとしても、出来事があったかどうかについて一番信頼できるだろう。たとえば天文現象などはそうだ。それに対して呉と蜀は、皇帝を称するまでは王朝としての記録の体制は整っていなかったと推測される。呉は初め地方政権という自己認識だったから、遅くまで正式の歴史は記録・保存されなかっただろう。蜀は遅れてそこに侵入したので、それ以前の歴史はほとんど記録されていず、魏に対抗して皇帝を称するようになった頃、官制が整えられ歴史記録が始まっただろう。だから、魏でも帝国になつて以後魏王朝の歴史として、過去にさかのぼって整理する作業がなされただろうが、呉と蜀では、ほとんど史料のない状態から、歴史の集成が行なわれたと考えるべきである。呉と蜀では人々の過去の見聞や伝承に基づかざるを得ない。記憶や伝承はしばしば修飾されるから、添削した魏よりもよけいに脚色されていると推定しなければならない。

こう考えると、斐松之の後半の批判に対して一つの仮説が成立する。そもそも陳寿が自分の書いた三書のあいだの矛盾に気づかなかつたはずがない。それでもなぜそのままにしたのだろうか。陳寿の前にはさまざまな史料があつた。陳寿は、それらを比較して信頼性の高いものだけをを選んで編纂したから、簡潔さを認められる史書になつた。その比較選別において、一応王朝のちゃんとした史官が編纂した歴史がもつとも権威ある史料と見えた

だろう。この推定によれば、三王朝の歴史記録を中心に合理的なものを選んだと考えることができる。そうすると、魏・蜀・呉と分けての記述には相互のあいだに矛盾点が出るのを避けられない。その矛盾を超えるためには、どちらが真実に近いか判定する必要がある。しかしそれらの歴史記録は主観的に書かれている。過去のこととなった出来事の真実をそこから抽出するすべがない。そこで歴史家陳寿のとった方法が、三国それぞれについて選びとった合理的な記述を併記することではなかったか。すると、三書の並立する『三国志』という形は、その歴史記述の方法に根ざしている。どの国が正統性をもつかという問題は、この方法に従属することになる。陳寿が、魏皇帝、蜀主・呉主と書き分けて工夫した背後には、三国をそれぞれ実際に帝国だつたとするほかはない史家の立場があつた、と考えられる。それは、矛盾を残すことになるが、複眼的な描写の効果を生む。

初めて『三国志』を読んだ者が無知のままに考えた以上のことは、すでに論じられているに違いない。諸葛亮という人を等身大に見てほかの人と比較するのは、中国人に人気絶大の人の偉大さを削ぐことになってしまふ。けれども、りっぱな人の実像を見究めることは、その人を貶めることではない。諸葛孔明が敬愛を集めるのは、その天才にあるのではなく、その生き方にあるのだ、とわたしは思う。

『三国志』を通じて、人々は自己の優位を勝ちとるために行動していて、ほとんどすべての人間はその目的のために状況に身を任せて、道を選ぶところがない。將軍はもとより宰相も例外ではない。魏と呉で帝位が確立したあとにも、外に強力な敵対者がいる緊張の中で、世界のどこにでもあつたような血なまぐさい権力闘争が起きる。現実には、曹操は自分の代では帝位を篡奪しなかつたけれども、子の代にそれを実行し、その魏でまた、大將軍・丞相として権力に登りつめた司馬氏による帝権の奪取が起きる。そういう状況の中で、諸葛亮は劉備との友誼をいつまでも大切にした。劉備の死んだあとも凡愚と評された息子の皇帝に仕えた丞相・大將軍は、国のために力を出し尽くして果てた。同時代に類例のないこの変わらぬ誠意こそが、彼をすべての人に敬愛させたのである。

陳寿の評は、軍略に触れず、その人の政治をほめて、尊敬を十分に表明している。ただ歴史家は、「毎年軍勢を動かしながら、よく成功をおさめることができなかつたのは、思うに、臨機応変の軍略は、得手ではなかつたからであらうか」と締めくくる。この最後の文が後世の中国人にたいへん不評である。しかしこれは、蜀で成人した人の残念さを表わしているのかもしれない。現代の眼で見ると、国力において劣勢の蜀が北伐をしても成功する可能性は少なかつた(天才軍略家でもどうしようもない)のに、資源を消耗しながらの連年の遠征は、まるで国の体制を維持するためにしたかのようなのである。

昔わたしはふとした機縁から、蜀の都であった成都に行ったことがある。劉備の墳墓も見学した。同じ場所に蜀の忠武侯諸葛亮の祠もある。地図を見て、その場所を武侯祠の名で呼んでいることを知った。孔明の人氣は主君劉備を超えているのである。三国時代の英雄たちが死んで千八百年近くが過ぎても、その名は人の口の端にのぼる。

三、テレビドラマ「項羽と劉邦」

『史記』の語る「鴻門の会」や「股くぐりをした男の転身物語」などは実にももしろい。その種の物語を『史記』の中で拾いあげるときりがない。テレビドラマ「項羽と劉邦」は、そういうおもしろい話をつなぎあわせて百話の連続ドラマに映像化してみせる。

『三国志』の記述が説話性を帯びることにもう触れた。補足して考えれば、昔にさかのぼるほど、あるいは動乱の時代、事件と同時に文字でメモする人は少なく、出来事は主として人々の記憶の中に保存される。年月が経つうちそれをまとめようとする人が、文字になっっている手紙やメモなどを集め、体験談を聞き書きするなどして、ひとまとまりの文字

記録ができたのだろう。そこで出来事は説話的に書かれることになる。王朝が確立するとそこでも、さかのぼって整理した記録文書をつくる。それらの作業では、記憶のあいまいさや人それぞれの理解の違いを、記録作成者の判断でつじつまが合うように書く。その際、文を修飾してりっぱな文にしようとする傾向があるだろう。そこでまた事実を離れた誇張が生まれる余地がある。王朝保存の文書では、王朝の立場を擁護する脚色も避けられない。出来上がった記録文書はすでに変形を受けていて、一次史料というよりも二次史料に近い。前代の歴史書を編纂する人は、王朝と民間に残るそういう記録類から一つの書物をつくる。ここでも、多くの史料を要領よくまとめる作業中、錯誤や筆者の観点が入った変形を免れない。それが後世の人の見る歴史書である。

司馬遷が『史記』で対象とした時代はずいぶん長い。その長い年代のうちに、今考えたようにして成立したさまざまな歴史記録に論評を加え、加筆する人も出る。人は出来事を納得がいくように理解したい。出来事を語る人も書く人も、人が聞き耳を立ててなるほどと思うように出来事を構成しようとする。話は尾ひれがついていったらう。こうして、司馬遷の前には、説話集と言ってもいいような大量の史料があつたのだと思われる。すぐれた人間観察者であつた司馬遷は、それらを立体的に構成して、通史と人物伝とそれにまつわる事件とを見事に再現した。諸侯国の分立した春秋・戦国の通史は「世家」として並

列的に記述している。それは、陳寿の『三国志』の構成のお手本だったろう。ところで、江戸時代の富永仲元は、中国人は修飾が多く誇張するくせがあると云ったが、司馬遷が扱った説話的な史料群にはすでにそのくせがあふれていたのだろう。『史記』に書きこまれて広く読まれたことで、中国人のくせはますます定着することになった。

司馬遷にとって時代的に近い秦末・楚漢戦争の時代も、漢王朝が確立する以前のことから、上で考えたように、史料自体がすでにかなり説話的だったと想像される。全体的に説話的な『史記』の中で、楚漢戦争の部分もそれ以前と似た書きぶりになるのは勢いというものである。こうして項羽と劉邦の戦いの物語は長いがおもしろく、安定した統一中国をつくり出す大きな歴史的一幕でもあるのでよけいにドラマチックに見える。

「項羽と劉邦」の戦いは、語り継がれていくうちにいよいよよふくらんで、あきれるほどの挿話をくり広げる一大物語になった。それを映像化したのがこのテレビドラマである。ビデオカメラは視野にある人も物も精細にリアルに写し撮るので、型にはまった長い説話を描くのにあまり向いていない。けれども、このドラマはそれを実行する。五十万の大軍が来るというのは言葉で言えばよい。戦争を具象化しようと戦闘場面を映すと、いつもきまって白兵戦でそのたびに血しぶきが上がる。ある場合には何十本もの矢が一人に突き刺

さる。先頃の映画「赤壁」もそうだったが、最近の中国映画は、コンピュータ・グラフィックスも利用して感心するほど誇大な映像をつくる。ここでは、城市におびただしい兵士が突進し無数の矢が空を飛ぶ。中国人のくせは現代も続く。

夜を表現するのに月が出て、それはほとんど満月である。これは日本の大河ドラマも同じ。知人に訊いたら、寒流ドラマでもそうらしい。風月を愛する東アジアでは、満月の夜が多いのか、天文事象を調査する必要があるだろう。「項羽と劉邦」では五日余りの上弦の月も出るが、水平に横たわっている。これも珍しい現象だ。冗談はさておき、旧暦の日にちの知られた出来事を描くのに、夜は雨もなく月、月は満月という月並みなつくり方をするドラマに、良質の芸術を求めることはできない。説話はむしろ舞台演劇と相性がいいから、長い連続テレビドラマは、一回の舞台「霸王別姫」が与える感動に及ばないだろう。連れあいの観る大河ドラマをちらっと見ていつもそう思う。「項羽と劉邦」は伝来の物語をあまり変更していないようなので、説話のテレビドラマ化として大目に見てもよい。しかし日本の大河ドラマは、マンネリを逃れるために手を変え品を変えて、新しい視点から製作したと売りこむ。その月並みなつくりの歴史ドラマは、歴史や社会や人間を見る眼を衰えさせるのではないか、すでに眼の弱った老人には心配だ。

そう言う老人は、長い「項羽と劉邦」の物語を見のがすことも少なくまだ観ている。あ、このとき事実はどういう展開だったのだろう、相手はどうしていたのだろうなどと、いろいろ想像をふくらませながら楽しんでる。最終八十話まであとわずかだ。金曜日、意外な人物が裏切ったふりをして項羽の陣営へ逃げ、説得力のない話で劉邦との休戦へ誘導した。あきれた筋書きだ。月曜日の昨日は、成立した講和協定をすぐに破棄した劉邦軍が引きあげる項羽軍に迫った。劉邦と項羽の戦いはいよいよ大詰めだが、秋分の日の今日はお休み。

二〇一四年秋分、太陰曆八月三十日無月

付記

ところでわたしは、後漢から魏にかけての時代の詩人に数えられる曹操父子の詩が、魏の帝紀で触れられるかと思っていたが、期待は裏切られ、文帝曹丕の文才が述べられる程度だ。そこで曹植の伝を読んでみたのである。「伝」であるこちらには曹植の詩文が記載されている。兄曹丕に勝る文才を示した曹植は、帝位継承者に目されたこともあったが、結局帝位には就けなかった。兄は皇帝、弟は臣下になったのである。しかも、帝位継承を競ったことで、同母の兄弟でも二人のあいだはうまくいかなかった。弟は自分の才能に自負があるから、何度か兄の皇帝に「臣」で始まる上表文を奉って、所論を述べ働き場所を求めた。甥が皇帝になってからも上表文が提出されている。けれども、その願いが採用されることはなかった。それらの上表文は名文として全文が載せられていて、文中に詩の類も含まれる。引用が多くいくつもの論理を屈曲させた華麗な文章だ。当時の文章の特徴が顕われているのだと考えられる。『三国志』中の文書類はどれもそうで、軍略などを説いている文章も同様である。第一の特徴はみな文章が長いことである。それを通信文として読む者が気短では、主旨をすぐにはつかめないだろう

ほど。さすが文の国中国である。それにしても、壮麗な曹植の上表文は、願いが叶わないことが見えているだけ切ない。

皇帝になりそこねた皇子には老兵千人程度がつけられ、小さな領地が与えられただけだった。曹植ほかの伝第二十巻の巻末の評が言う、—魏氏の王公はいたずらに領土支配の名目を与えられているだけで、国家としての実質はなかった……牢獄にいたのと同じであった……、と。斐松之の註が引く文章も、王族は朝廷の藩屏となることはできなかつた、と述べる。曹氏の王朝がもろくも崩れた原因の一つとされているのである。前漢で起きた呉楚七国の乱のような王族による反乱を恐れたのだろうか。現に、魏から帝国を奪った晋は王族の乱で衰亡の憂き目にあつたのであるが。